校長室だより～燦燦～ №９１

意を体する

2020.4.10

昨日、梁川高校では無事に入学式が行われた。式の前日には、会場作成などが行われた。午後の３時からは式場や教室などの最終点検を行った。式場となる体育館には、例年と違って間隔が広げられたパイプ椅子が整然と並べられていた。だが、私としては新入生が座るパイプ椅子の間隔が気になった。想定していたものよりも狭い。

会場作成の担当者は、何パターンか試してくれていた。その上で間隔を決めて整然と椅子を並べてくれていた。「ここまでやってもらったのに、今から修正するのは申し訳ない」という思いと「新型コロナウイルス感染症対策にベストはないかもしれないが、できる限りのことをして入学式を実施したい」という思いが交錯した。

確かに間隔を広げてあるのは一目瞭然である。しかし、それで十分なのかという問題である。「こんなことならば、会場作成に立ち会えばよかった」と反省した。その場に居合わせた教員にしてみれば、随分と優柔不断な校長に見えただろう。私がなかなかふんぎりがつかない態度をとっていたのは、誰かに「もっと間隔を広げましょう。みんなでやればすぐ終わります」と言ってほしかったのである。それは教頭でも誰でもよかった。

このような場合の鶴の一声やトップダウンは好きではない。できれば避けたい。そこで、誰かの一声を待つ作戦に出た。だが、私の目論見ははずれた。きっと先生方は、私がお願いすれば、すぐに作業にとりかかってくれたと思う。そういう集団である。

結局、私の一声がないままに、このままでいくことにした。その後、教頭が校長室にやってきた。そこで、私は正直に、誰かの一声を待っていたことを話した。それが正しいやり方かはわからない。教頭は、自分が言えばよかったと思ったことだろう。４月１日から本校の教頭になり、毎日、朝から晩まで奮闘している人に、そこまで求めようとは思わない。ただ、今後のために、教頭研修として「意を体する」ということについて話をした。意を体するとは、人の考えや気持ちを理解し、それに従うことである。あるいは、他人の意志・意向を自分のものとしてそれに従うことである。校長の意を体することは教頭の大事な務めである。

ここからが、本校教頭の行動力の為せる技である。そろそろ帰ろうかと廊下に出てみると、体育館の明かりがついている。何が行われているかは容易に想像がついた。そっと体育館をのぞいてみた。教頭と何人かの先生方で椅子を並べ直していた。私は見なかったことにして校長室に戻った。しばらくして、教頭が校長室にやってきた。「校長先生、体育館を見てください」私は何も知らないことにして体育館に入った。間隔が十分にとられたパイプ椅子が整然と並べられていた。それはそれは見事だった。

この日の午前中には表彰される生徒の立派な返事に涙した私だったが、夜になって今度は先生方に泣かされた。新学期スタートの日に、すでに２回も泣くことになってしまった。これでは、この１年どのくらい泣くことになるのだろう。毎日忙しい教頭に余計な気苦労をかけてしまった。教頭は職員室で先生方に頭を下げたに違いない。こうも思った。もし、夜の体育館で椅子を並べ直す作業をする先生方の中に、この４月から本校の教員になったばかりの若者がいたら、さぞやいい研修になったことだろう。それこそＯＪＴである。

このようなちょっとしたドラマがあり、本校の入学式は無事に行われた。いつものことだが、先生方に感謝するばかりである。